●春日部市民文化講座（第 12 回）

◆日　　時：2014 年 10 月 8 日(水) 10 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～11 時

◆テ ー マ：講演「戦国時代の利根川」

講師：新井 浩文さん（埼玉県文書館学芸主幹）

◆ゲスト紹介：1962 年、埼玉県岩槻市（現さいたま市）生まれ。1985 年、駒澤大学文学部歴史学科卒業。埼玉県立博物館学芸員、埼玉県市町村支援学部生涯学習文化財課主査などを歴任。現在、埼玉県立文書館学芸主幹。主要論著：「さきたま文庫5 慈恩寺」(さきたま出版会、1989 年)、「関宿周辺の変遷と地域－戦国時代を中心に」(同成社、2005 年)、「関東の戦国期領主と流通－岩付・幸手・関宿」(岩田書院、2011 年)。共著：「教会アーカイブス入門」(いのちのことば社、2010 年)。

■戦国時代の利根川

はじめに、現在の利根川の流れを押さえておきましょう。利根川というのは、上州・群馬県の方から流れてきまして、埼玉県とは茨城県や千葉県境を流れて行き、現在は銚子の方に流れています。しかし、この銚子への流れというのは歴史的には古いものではなく、近世・江戸時代になってから流れを大きく変えました。それまでは、東京湾に流れていくのが本来の利根川の流れだったのです。ですから、戦国時代の利根川というのは東京・江戸湾に流れていたのです。その流れというのは、現在、春日部市内を流れる古利根川筋を流れて、江戸湾に流れていました。これが基本的な流れでした。

図の赤いポイントが千葉県野田市の関宿です。戦国時代は関宿城がありました。昔は、今の江戸川よりも西側の古利根川筋を流れて江戸湾に注いでいました。それが現在は、関宿の北側を通って銚子の方に流れています。ここで大きく二つ説明しておきますと、戦国時代の川の流れは二通りありました。一つは、上州から来て古利根川沿いに江戸湾に入る流れと、もう一つは、栃木の鬼怒川から流れてきて東の銚子に流れていく流れがありました。これを俗に常陸川（ひたちがわ）水系と言います。実は、戦国時代までは常陸川水系と利根川水系は繋がっていなかったのです。それを江戸時代に強引に赤い部分で繋げました。これは江戸時代の仕事です。これが大きな河川の変換期でありました。

■戦国時代の川と城

古代の河川は、国境と共に神社分布の境という役割がありました。中世にはいると、利根川の右岸と左岸に荘園があり、西側が太田庄で、東側が下河辺庄でした。この二つは、鎌倉幕府が押さえている大きな荘園でした。その荘園の真ん中を利根川が流れていますから、氾濫を起こされてしまうと困る訳です。そこで、荘園を管理するために堤を築きます。また、利根川の水運も発達します。中世の品川湊から内陸・春日部辺りまで川を使って盛んに物資が運ばれていたというのが、鎌倉時代の特徴です。古い利根川流路には河畔砂丘ができますが、杉戸の下野の一里塚を発掘すると、4m 位の河畔砂丘の下に鎌倉時代に築造した人工堤防跡を見ることができました。戦国時代に入ると、川を利用した城づくりが盛んになります

■防御としての川と治水工事

春日部地域もそうですが、川を盛んに利用して物資を輸送したり、城を築いていた戦国大名がいます。それは関宿城主の梁田氏といいます。古河公方の家臣で、度々春日部辺りまで来ています。「古河公方」というのは何かというと、鎌倉時代には鎌倉に将軍がいました。室町時代には幕府が京都に置かれましたので、京都に将軍がいました。しかし、鎌倉に京都の将軍の親戚が居て、鎌倉公方と呼ばれて関東から東北地方を管理していたのです。その中で家臣とトラブルを起こして鎌倉にいられなくなった公方は古河に移ったので「古河公方」と呼ばれるようになったのです。その古河公方の重臣だったのが梁田氏です。古河公方が古河の地を選んだのは、利根川の舟運を駆使するのに良い拠点であったためと言われています。岩槻城も元荒川を防御とした城作りをしています。

■戦国時代の川には橋が架からなかった

次に戦国時代に川を使ってどんな動きがあったかということをお話してまいります。戦国時代は川が防御になっている訳ですから川には橋を架けずに渡し舟で渡して行くというのが基本でした。ですから、戦国大名にとっては「瀬」を押さえることが非常に重要なことでありました。瀬をわたれない時には船橋を架けることもありました。

新井さんのお話はまだまだ続くのですが、テンポが良くてメモが追いつきませんでした。